

都道府県別賞一等

笑顔のために

静岡県 静岡県立清水南高等学校中等部 三学年

中村 涼那

「おかえり！よく来たね。」

暑い日差しの中、セミの大合唱が聞こえる。畑の中から顔を出した祖母が、いっばいの笑顔で迎えてくれた。

新型コロナウイルスの流行により、しばらく祖母の家を訪れることを控えていた。秋になると送ってくれる祖母が作った世界一おいしいサツマイモのお礼を、テレビ電話でしか伝えることができずにいた。

久しぶりに会った祖母は、相変わらず元気だ。ほっとした。若いころ生命保険会社の営業職員をしていたという祖母は、話がとても上手で友人も多い。両親にはちよつと相談しにくいことも祖母になら話しやすいと思っている。祖母は話し上手で、聞き上手だ。

「たくさんの人たちと会い、その人たちのライフプランを守るためにたくさんお話してきたからね。」

祖母は二十六年間、生命保険会社の営業職員として数えきれないほどの人々の病気・ケガの入院、手術等の給付金の手続きをしてきたそうだった。

「すーちゃんには生命保険といってもまだあまりピンとこないだろうけどね。」
と言いながら、祖母がこんな話をしてくれた。

営業職員として仕事をしている中で、命の終わりの連絡を受けた時が一番悲しかったそうだった。

中でも記憶に残っているのが、当時二十七歳で交通事故で亡くなった若い息子さんの生命保険の手続きをした時のこと。とても仲の良いご家族で、ご両親は一人息子をとても大事に思っており、息子さんもご両親のことを本当に大切にされていたそうだった。連絡を受け、通夜の会場で読経の流れる中、遺影に手を合わせ、これからまだ人生を楽しむはずだったのに、親孝行もしたかったろうにと涙がこらえきれなかった。優しい息子さんは、きつと残されたご両親のことが心配でならないだろう。祖母は悲しみをこらえながら、ご両親に約束をしたそうだった。

「息子さんの最後の親孝行の生命保険、しっかりお手続きさせていただきます。ご安心ください。」

當時を思い出しながら、祖母は言った。

「あの時は、一枚の保険証券の重みを強く感じたねえ。」

第60回中学生作文コンクール

今でも毎年、そのご両親から届く年賀状を祖母が見せてくれた。優しそうな笑顔だった。二十七歳で亡くなった息子さんとそっくりの笑顔だそうだ。

生命保険は、たくさんの人が少しずつお金を出し合って、大きな共有の準備財産をつくり、万が一のことがあった場合には、その中からまとまったお金を出し、お互いに経済的に助け合う「相互扶助」の精神で成り立っているのだそう。

『一人は万人のために、万人は一人のために』だね。」
祖母が笑って言った。私もその言葉は大好きだ。

今十四歳の私は、自分の将来についてちょうど模索中だ。どんな道に進むにせよ、人の役に立つ仕事がしたい。祖母と話をしながら強く思った。